

思春期でふれるプロフェッショナルな世界は可能性をより広げ、社会で大きくはばたく力となる

漫画家 小山宙哉さん × 京都市立銅駝美術工芸高等学校校長 吉田功

「宇宙兄弟」で知られる漫画家 小山宙哉さんは銅駝美術工芸高等学校の17期卒業生です。小学生のころから似顔絵が得意で、同校の陶芸科在籍中においても先生や仲間を描き続けた小山さん。第一線で活躍される漫画家としての背景には、銅駝での高校時代が大きな意義ある日々として今なお支えとなっておられるようです。



小山 それぞれの分野を目指して入学してきている生徒が多いので、各科の特徴はにじみ出ていました。ファッションアート科の生徒は私服もおしゃれだったし、西洋画科の生徒はアーティストックで、ヘアスタイルも独特でぶっ飛んだところがありました。

吉田 実習や勉強以外にクラブ活動をされていたと聞きましたか。

小山 ミニサッカー同好会を自分で立ち上げました。当時は自分自身に勢いがあって、やりたいことは思いきってやっちゃおうという感じだったのです。先生もダメだとか無理だとか言わず、同好会を作るなら顧問が必要だとか、発足するための具体的な方法を前向きに教えてくれました。サッカーの好きな体育の先生が顧問になってくれて、練習メニューなども教えてもらいましたね。活動はやりたいときに集まってやるという感じでしたが、後輩の女子生徒が自らマネージャーになってくれたり、盛り上がりました。

プロフェッショナルな世界との出会い

吉田 銅駝での思い出をいくつかお話いただけますか。

小山 地下の食堂のおばちゃんがメニューにないものでも、要望に応じて作ってくれたものがあります。とろろ蕎麦は特別に作ってもらっていた記憶があるのですが。

吉田 小山さんぎっかけのメニューだったんですね。いまメニューにしっかり入っています。美術についてはいかがですか。

小山 やはり実習はおもしろかったです。陶芸科の実習はやる人が多いです。それはおもしろさにも通じますが、陶芸は美術のいろんな要素が込められています。造形も彫刻も、絵付けもやるという総合芸術です。

吉田 漫画家として第一線で活躍されていますが、高校進学で銅駝を受検し、進学されたことを振り返っていかがでしたか。

小山 建前ではなく間違いなく銅駝を選んでよかったです。小・中・高校・専門学校という学生時代の中で銅駝での高校生活はもっとも楽しくて充実していました。深いつながりのある友達もできました。今でも高校時代の仲間とは付き合っています。

吉田 これは保護者の方の思いもあるのですが、やはり一般的な普通科高校への進学を良しとされる傾向がまだ強いのですが、そこをあえて美術を専門とする高校に進む魅力は何だと思われますか。



小山 美術に限らず、専門的なことを学ぶ高校では、「プロフェッショナル」な世界にいち早く触れられる、体験ができると思います。例えば先ほどの道具一つでもプロと同じレベルのものが使えますし、プロのやり方を教われるなど、たとえそれを将来の生き方にしなくても、ある期間、一つの分野の深い世界で活躍される方（先生）から学べるチャンスに出合えることは大きな意義があると思います。十代という若い時にプロ



の世界を体験したら、その後、社会で何をするにしても役立ちます。また友達はず美術が好きでここに来ているので、絵や陶芸やアートについてすぐに分かり合えるし、語り合えるし、さらに世界が広がります。自分自身も絵がうまくなりたいとか、動物や漫画のキャラクターなどについて話す時も、共通の認識があるのですぐに相手に伝わる関係性はいいものです。そういう仲間が集まる専門性の高い高校生活を過ごせたことは良かったと思っています。仲間それぞれにもこだわりがあるので、一緒にいるだけで幅が広がられたことも良かったですね。

本当に好きなことをやろう

吉田 充実した3年間だったようですが、卒業後の進路について悩まれたりしましたか。

小山 まわりは大学へ進学する人も多かったのですが、ぼくは大阪市立デザイン教育研究所というところに入りました。2年間、相変わらず先生の似顔絵とかマンガを描いていましたけど(笑)。デザインを研究する学校に行ったのに、結局マンガを描いていたんです。それでも漫画家になるうとは自分の中では思っていなかったんですよ。ただ楽しいから描くという感じでした。卒業制作もマンガを描いて賞をいただきましたが、卒業を前に先生から「漫画家になるのか」と聞かれて、そのときに初めて人からそんなふうに言われるなら、漫画家の可能性もあるのかなあと考えたぐらいです。

吉田 ではデザイン教育研究所の卒業後から漫画家を意識された……。

小山 卒業後は大阪のデザイン会社で働きました。仕事は楽しかったのですが、やっぱりマンガを描いているほうが楽しいなあと。帰宅後にこつこつと漫画を描いて、24歳でまとめた作品を描き上げたので、漫画家としてやっていけるか、才能があるかどうか確かめてもらおうと出版社に持ち込んでみたのです。

吉田 デザイン会社の仕事とマンガの創作活動を並行してやっていく中で、最終的に会社を辞められますが、安定した仕事を辞めるのは、勇気が要ったと思いますが。

小山 会社を辞めたら経済的に厳しくなるのは確実です。そもそも東京へ行くことも大丈夫だろうかなどいろいろ考えました。でもこの会社でずっと働き続けるほうが自分には不安だと感じたのです。本当に好きなことをやれるなら、お金がなくても楽しいだろうし、なんとかなると気持ちを持ち替えました。

吉田 そしていくつかの作品を経て「宇宙兄弟」が誕生しますね。宇宙というテーマはかなり壮大ですが描き始めるきっかけは何でしたか。

小山 きっかけは担当の編集者が提案してくれたテーマです。今後、創作に取り組むなら(得意な)ジャンルがあったほうがいいし、宇宙を好きな読者層がある。ぼくのタッチで宇宙マンガを見たいといわれて。NASAなど取材も楽しそうなテーマでした。

吉田 就職して、そこから漫画家の道を目指すところは、宇宙兄弟にも通じるところがありますね。登場人物もパラエティ豊かですが、銅駝の高校時代の教員の人物像、表情や性格、態度など参考にされているのですか。

小山 知っている人をヒントにキャラクターを作ることもあります。想像の中での人物像もあります。例えば宇宙兄弟の母親は、妻のお義母さんがネタとなっています。実在人物に肉付けしたキャラクターなのでそのままではありませんが。

“深める方法”を知ることができる学校

吉田 では銅駝での高校生活を振り返って、ここでの3年間は漫画家の仕事に影響を与えていますか。

小山 銅駝では、自分の人生を自由にしたいと許可された気がします。漫画家になったのも、やりたいことを思いきりやっていいと感じられたのが銅駝でした。心の支えになり、好きなことを思いきりできた、そんなふうに道筋をつけてくれた高校ですね。

吉田 中学生や高校生はまわりの友達の様子と自分を比較して悩むことが多いです。今は特にそんな時代です。銅駝が個々の世界観を認め、多感な生徒も支えられ、エネルギーをもらえる、おしつぶされない学校と自負しています。卒にはまらず、いろいろな人がいていいという校風です。そんな学校で過ごし、漫画家として活躍されている小山さんの銅駝での3年間は有意義だったのだと感じます。

小山 高校時代は劣等感を感じることもあります。自分より才能豊かな人がいると落ち込んだり。でも好きなことを追求していれば自分の個性が必ず出てきます。

吉田 進路については、銅駝のように専門性の高い高校に入ると逆に世界が狭くなるという不安を抱かれる人もいます。



小山 ぼくは、むしろ陶芸なら陶芸をプロの視点で専門的に取り組めることのほうが、人生を広く深くしてくれる、価値があると思っています。深くやる、という“やりかた”を体験できたことは社会に出て仕事をする上でも役立ちます。失敗したり、いいものをつくったり、大人とは、プロとはこういうことなんだということを早くから実感できます。浅いところと、深いところの両方の世界を知る体験ができるのは専門高校の良さではないでしょうか。

吉田 今後、新作など目指しておられることなどありますか。

小山 マンガ「宇宙兄弟」も終盤に近付いています。実は漫画は終わらせることが一番難しいんです。漫画作品で「最終回が一番いい!」っていうのは意外と少ない。最終回が最高といわれる作品にすることが今の目標です。

吉田 最後に、銅駝の先輩として小山さんからメッセージを一言お願いします。

小山 高校時代は気にしていませんでしたが、自分の好きなものを表現すること、考えやものの捉え方を表現することが多い中で、いろんな人の作品を見たり、自分にはない感性や捉え方のある人たちと出会えたことは幸せなことでした。ここでは自分の人生の視野が広がられるチャンスがあります。自分自身の創作やそれをアピールすることも大事ですが、他人のもののづくりの現場や作品そのものに触れることは、さらに自分の世界が広がることにつながります。そのチャンスが銅駝で得られたことは良かったと思っています。